

実験心理学の魅力

今田 寛

2016年2月18日発行 (Ver. 1.0) ●発行元: ちとせプレス

ことわざに表れる心理現象は、心理学の実証研究からどのように理解できるのか。ユニークな心理学の入門書『ことわざと心理学——人の行動と心を科学する』を、関西学院大学の今田寛名誉教授が刊行されました。そこではことわざを手がかりにして、心理学の幅広い領域に関係する研究が取り上げられていますが、通底するのは「科学的根拠に基づくアプローチ」の大切さ、そしてその面白さ。ご自身の研究史を振り返っていただきながら、心理学における実験や実証的アプローチの魅力について教えていただきました。

Section 1

心理学との出会い

——心理学、特に実験心理学に長年携わってこられました。心理学との出会いはどういったものだったのでしょうか。

私の場合、心理学との出会いというよりは、父親(今田恵)が心理学者だったもので、心理学の中に生まれ落ちたようなものでした。父は牧師の息子で、将来牧師になることを両親から期待されて、当時はまだ神戸にあった関西学院の神学部に進み卒業し、牧師の資格を得ます。しかし人間経験の学としての心理学を学びたくて東京帝国大学に進み、1922年に卒業と同時に母校に呼び戻され、日本の私学で最初の心理学実験室を開設しました。もともと牧師を目指していたこともあってか、父は実に温厚な人格者で、家庭の底辺には、人間・生命への関心が日常的に漂っていたのかもしれない。そのためか、子供たちは、後に皆、人間と生命に関係のある仕事につくことになりました。兄は医学、2人の弟は生物科学、そして私は不甲斐ないほど抵抗もなく、心理学の道に進むことになりました。

加えて2人の義兄も生物学者と牧師です。

実験への関心は、直接的には母親の影響が強かったと思います。母は好奇心の塊のような人で、いつも目をキラキラ輝かせ、わからないことをわからないままに放っておけない人でした。食事中でも子供にわからない言葉が話に出てくると、「ヒロ(私の幼少時の呼称)、『広辞林』!」と号令がかかります。すると箸を置いて、わからない言葉の項を皆の前で朗読したものでした。知がお行儀に優先していたようです。

そのような実証精神が高じてひどい目にあったこともあります。私が小学校(当時は戦時中でしたので国民学校)4年生の折、校舎の屋上でクラスで飼っていたアヒルを友人と2人で世話をしていたとき、「アヒルは飛ぶか?」ということが話題になりました。

「それなら飛ばしてみればわかるじゃないか」ということになり、3階建ての校舎の屋上から、下に掘られた防火用池に向かってアヒルを放り投げたことがあります。それを窓から見ていた級友の1人が先生に御注進に及び、先生にこっぴどく叱られ教授用のそろばんの上に正座させられました。あの痛みは告げ口をした友人の顔と共にいまだに忘れられません。なお実験の結論は、アヒルは羽をバタバタさせて無事着水したので、「飛びもしなかったが、落ちもしなかった」でした。

一方、弟は高校時代、「ナトリウムの結晶は水に入れると爆発する」のは本当かということを確認めたくて理科室に1人で忍び込み、物陰から水槽に向かってナトリウムの結晶を放り込み、見事爆発、教室の窓ガラスが全部割れる事件を起こしました。学校に呼び出されて注意を受けて帰って来た母親は、弟を叱る反面、心なしか満足そうに見えました。

しかし実験心理学そのものとの出会いは関西学院大学の心理学科に入ってからです。当時、父は大学行政に忙しく、学科運営は条件反射研究で有名な古武弥

しょう
正先生が行っておられました。先生の口癖は「基礎あつての応用じゃ！」で、学部では徹底した基礎重視で、実験心理学が柱でした。

心理学の基礎としての実験

——実験のベースとなる実証的な発想と行動が、家庭の中で培われたわけですね。関西学院大学の心理学科では古武先生のもと、「基礎重視」として実験心理学が柱になっていたということですが、実験が心理学の基礎であるというのは、どういった意味合いだったのでしょうか。

このように改まって質問されると、なるほど“心”と“実験”は結びつきにくいかもしれませんが。心理学が専門だというと、この頃でも、まるで読心術者が目の前にいるかのように「ああ怖！」と怖がられることがあります。書店の心理学の棚を見ても、並んでいる本はいわゆるハウツーものがほとんどです。どうすれば悩まなくてすむかとか、どうすれば人の心がわかるかなど、どうすれば対人関係がスムーズにいくのかなど。そういうポピュラー心理学から見れば、心理学が実験科学というのわかりにくいでしょう。

「実験が心理学の基礎であるというのは、どういった意味合いだったのでしょうか」というご質問ですが、これは古武先生の教育方針に対する質問だと思います。関西学院大学の心理学科では、将来心理学の道に進む者も進まない者も、すべてが4年次に実験あるいは調査研究に基づいて卒業論文を書かねばなりませんでした。そのために、当時の呼称で一般実験（2年次）、特殊実験（3年次）という実習科目が必修で、それらを通して卒論に向けての実験法の基礎や調査法の下地が整えられました。

臨床心理学的なことは学部では一切許されず、それは大学院に進んでからでした。学部で実験実習が重んぜられたということは、けっして実験の内容・テーマが問題ではなく、人や動物を対象に実験を行って正しい結論を導き出すためにはどのような注意が必要かを、身をもって経験することにあつたように思います。ミュラー・リヤーの錯視の実験のような古典的な知覚の実験でも、人を対象に実験をする場合に気をつけなければならない誤差（真実を歪める要因）が多々あり、それを手続き上で打ち消すようにしなければ、正しい結論に到達できないことを体で覚えるのです。それによって注意深い態度、クリティカルな態度、キメの細かい論理的な思考法が身につくというか、刷り込まれま

す。一言で言えば、学部の実験実習は態度教育だったと思います。そして、この複雑なものに科学的に注意深く迫る態度は、将来どのような道に進むにしても大変大切な態度だったと思います。

加えて実験をすると報告書を書かねばなりません。書くといっぱい赤が入って戻ってきます。書き直し再提出です。これでも鍛えられました。

私はそんな中で白ネズミを使った動物実験にはまりこみました。いまと違って当時は、動物の単純な行動の理解が、最終的には複雑な人間の行動の理解につながるという、ボトムアップ的な考えが主流だったこともあるでしょう。1つの実験で見つかることはほんのちっぽけな事実ですけれども、それをコツコツと積み上げていくプロセスは、私の性分には合っていたと思います。ただのめり込み出すと独りよがりになって、「実験のための実験」になるので、自分が心理学で何をを目指しているのかを忘れないように努めていたように思います。

Section 2

恐怖・不安に動機づけられた回避行動

——実験実習の中で、科学的に確認し事実を積み上げていくための態度や思考法が鍛えられていくわけですね。今田先生は白ネズミを用いた動物実験を進められたということですが、その頃はどのような問題関心をもたれ、どのような実験を行っていたのでしょうか。

私は3年生の最初のゼミ発表のときに、万全の準備をして臨んだにもかかわらず、すっかりあがって酷い目にあつたことがきっかけで、異常行動の実験的研究に興味をもちました。そこで卒論で選んだテーマは「マイヤーのフラストレーション理論に関する実験的研究」、修士論文のテーマは「回避行動に対する罰の効果」でした。いずれも白ネズミを用いた基礎実験で、恐怖・不安に動機づけられた回避行動の異常性を示したものでした。

例えば卒論では、恐怖・不安に動機づけられたネズミは、異常なまでにある方向への反応に執着し、その方向をブロックすると、他に楽な反応の可能性がたくさんあるにもかかわらず、あくまでブロックされている自分の好みの方向に固着し、時にはブロックを飛び越えて1mもの大ジャンプをして装置の壁に頭をぶつけて鼻血を出すというような異常を見せることを

示しました。

また修士論文では、回避行動（恐怖に動機づけられた行動）を消す（消去する）ために、起こった回避行動に罰を与えると、与える罰が強いほど、その罰に向かって素早く、激しく、長く回避反応をし続けるという矛盾が起こることを示しました⁽¹⁾。私はこのような事実を、マイヤーのように別建てのフラストレーション理論に頼らずに、通常の学習理論で一元論的に説明しようと努めました⁽²⁾。

後に講義をするようになったときの講義ノートを開いて見ますと、「生活体の生存・適応にとって不都合な状態は？」とあり、次の5つが書かれています。①客観的に恐れる必要のないものを恐れたり、恐れ続ける場合（恐怖症、強迫的行動、恐怖のインキュベーション）、②恐れる必要のないときも、四六時中ビクツイているような状態（慢性的不安、不安神経症）、③問題解決能力が備わっているにもかかわらず、問題解決ができない場合（アガリ、学習性絶望）、④より労が少なく、苦痛も少ない合理的反応が可能であるにもかかわらず、労多く苦痛な不合理行動に固執する場合、⑤不都合状態に陥りやすい個体、陥りにくい個体（個人差）、とあります。

これを見てわかるように、私は③のアガリの経験をきっかけに、④の問題を卒論と修論で手がけたこととなります。そしてその後の研究で、最も力を入れたのが②の慢性的不安を引き起こす心理的要因（物理的要因ではない）の問題でした。⑤の個人差（個体差）の問題は気になりながら自分では納得のゆくことはできず、教え子の何人かがこの道の研究者になりました。

この講義ノートのメモを見て思い出すことは、当時学生に話したことです。それは、研究をする場合、大きな全体的視野を失うな、「森に入って森を見ず」になるなどということでした。そのためには、まず一步引いて自分が本当にやりたいことは何かを見極め、そのやりたいことに関わりのありそうな研究テーマを、素朴に自分の経験に照らして、あるいは論理的可能性として羅列してみることが大切ではないかということでした。心理学の研究テーマは無数にありますが、W. ジェームズ⁽³⁾も言ったように、自分にとって身近で温かい日常的事実から研究に入らないと、実験のための実験になってしまうと、よく話したものです。自分に対する自戒も込めて。

——ご自身の体験がきっかけとなり、白ネズミを用いた回避行動の研究を始められたのですね。「大きな全体的視野を失うな」というのは、何事においても重要

なことだと思います。その後、慢性的不安を引き起こす②の心理的要因についてのご研究に力を入れたということですが、具体的にはどのような研究を進められたでしょうか。

ご質問に答えるためには、前回述べた回避行動のことについても少し説明が必要なので、今回の回答は少々長くなることをお許しください。

回避学習のネズミの実験でよく用いられる装置に、シャトル・ボックスという装置があります。これは電気格子床をもつ同じつくりの2つの部屋の間を、信号（CS；条件刺激と呼ぶ）に続いて床から与えられる電気ショック（US；無条件刺激と呼ぶ）から逃避したり、信号中にショックの到来を予想して回避するために、2部屋の間を行ったり来たり（シャトル）する、逃避・回避学習のための実験装置です。

私が若いときに心酔したアメリカの心理学者、マウラー（O. H. Mowrer）は、この回避学習を説明するために学習2過程説を唱えました。第1過程は恐怖（あるいは不安）の古典的条件づけです。学習初期には、ネズミはまだ（例えば10秒の）信号（CS）の後に床からショック（US）が与えられることを知りませんから、CSとショックUSを何度か対経験します。その結果、CSに対して恐怖の古典的条件づけが起こります。次に恐怖は強力な動機ですから、ネズミは恐怖が喚起されると何とかして恐怖を解消しようと試行錯誤をします。そしてCS中に隣室に移動する回避反応を学習します。これによってCSは停止し、ショックを受けないですみ、恐怖から解放されます。これが第2過程です。つまり恐怖を動機とし、回避行動による恐怖の低減を報酬（強化）とする道具的条件づけが成立する過程です。

つまり最初はショックと対にされる信号を「恐れる」古典的条件づけ、続いて信号によって喚起された「恐れによる」道具的学習の両者がドッキングされた形で起こるのが回避学習だと説明するのです。これは人の不安神経症や強迫神経症の症状の説明としても非常に説得的に思えたので、私はこれによって異常行動への学習理論的アプローチが可能だと考えて魅了されました。

しかし回避行動の研究を行っているうちに、何かもどかしいものを感じるようになりました。というのはこの考えによると、観察している回避行動は、2つの過程が混じり合ったものなので、どちらの過程がどの程度そこに反映されているのかはわかりません。そこで、第1過程の恐怖の条件づけそのものを純粋に研究

するようになりました。

しかしそこで疑問が生じました。どうも条件づけの研究者は、CSやUSの強度や長さ、両者の時間関係のような物理的変数の条件づけへの影響ばかりを研究の対象にしていることに対してです。そういえば古くからの精神物理学も、物理刺激と感覚の対応関係を追求するものでした。もちろんこれらの変数に関する研究は、いわゆるパラメトリックな基礎研究（当該の現象に関わりのある基本的な変数の影響に関する研究）として重要です。しかし心理学者であるならば、なぜ物理的変数でなく、心理的変数に関心をもたないのだろう。物理的変数を一定に保ちながら心理的変数のみを操作して、その心や行動への影響を見ることは可能ではないのかと思うようになりました。

そして自分にとって“身近な温かい日常経験”に思いを巡らせているうちに、次のような経験に思い至りました。例えば中学校のときの英語のクラスで、名簿順に当てる先生と、まったくランダムに当てる先生だと、授業中のストレスはどちらが高いだろう。どちらも当たるときには当たるので、経験する物理的経験は同じです。しかし前者だといつ当たるか予想がつくので、青木さんが当たっているときには、山田さんは安心してられます。しかしランダムに当てる先生の場合には、いつ当たるかわからないので心の休まる暇がありません。つまり四六時中ビクビクしている慢性的不安の状態（前の回答の④の状態）に置かれます。この状態は、物理的経験としては同じでありながら、嫌悪経験の予測可能性／不可能性という心理的変数において異なる状態であり、このような変数こそ心理学者がもっと関心をもってもよいものではないかと思うようになりました。

また、英語のクラスに予習をして臨んだ場合と予習をしないで臨んだ場合にも、当たるといふ等しい物理的経験への対処可能性／不可能性という心理的変数における違いによってストレスはずいぶん違うはずですが。下調べしないで臨んだ英語の授業で、当たらないように友人の陰に頭を低くしてビクビクした経験はないでしょうか。しかし予習をしていると、先生の顔をまともに見ることができません。

嫌悪刺激の予測可能性／不可能性、対処可能性／不可能性という心理的変数とストレス（慢性的不安）の関係に関する私の一連の実験的研究はそのようにして始まりました。しかしこの研究は、私の当時の心理学に対するいまひとつの不満とも結びついていました。

条件づけの研究ではCS—USを提示し、CSに対する条件反応（CR）を測定します。行動主義で有名な

J. B. Watsonの「アルバート坊や」の実験⁽⁴⁾のように、音CSとショックUSに対する恐怖CRを測定します。これはこれでよいのですが、私の条件づけ研究に対する不満は、その「ブツ切り主義」といもいうべきものにありました。

つまり条件づけの研究では、対象となる動物や人のCS中の反応のみにしか注目せず、いわゆるITIと呼ばれる試行間隔のことは注目されません。つまりCS中の出来事が「凶」で、ITI中のことは「地」（背景）でしかありません。しかし、人や動物の適応過程、生き様のような観点から学習の問題に関心をもっていた私には、ITI中にも生活体は存在し続けて、その間もさまざまな情動経験（「一喜一憂」）している姿を無視する「ブツ切り主義」にはどうも共感できませんでした。つまり上に述べた四六時中ビクついた状態（慢性的不安）は対象になりえません。

そこで私は、嫌悪刺激を用いた条件づけ研究を「凶地反転」し、CS中のCRの研究をむしろ「地」として背後に退けて、通常、人が無視するITI中の情動経験を従属変数（「凶」）にした研究をするようになりました。そして情動の指標として選んだのは、ネズミの水なめ反応でした。のどの渇いたネズミが安定して摂水チューブから水をなめている行動に重ねて予測可能ショックや、予測不可能ショック、あるいは対処可能ショック／不可能ショックを与えて、普段の水なめ行動の乱れ（抑制）を情動（慢性的不安）の指標とする実験パラダイムを用いて、数多くの実験を行うようになったのです⁽⁵⁾。

しかしこれ以上書きますと話が長くなりすぎるので一度ここで切ることとします。そして、このような考えも一部含めて書かれた『恐怖と不安』⁽⁶⁾という書物で、母校関西学院大学から1977年に文学博士号を取得しました。なお私は1963年に留学先の米国アイオワ大学からすでにPh. D. (Doctor of Philosophy)を受領していたので、これは2つ目の博士号ということになります。

■ 文献・注

- (1) Imada, H. (1959). The effects of punishment on avoidance behavior. *Japanese Psychological Research*, 8, 23-38.
- (2) 今田寛 (1960). 「マイヤーのフラストレーション固定仮説 (frustration-fixation hypothesis) に関する諸問題」『関西学院大学人文論究』2, 101-125.
- (3) ジェームズ, W. (今田寛訳) (1992). 『心理学 (上)』岩波書店, p. 339. (原著 1892年)
- (4) Watson, J. B., & Rayner, R. (1920). Conditioned emotional reactions. *Journal of Experimental Psychology*, 3, 1-14.

実験の動画 (YouTube より)

<https://www.youtube.com/watch?v=FMnhyGozLyE>

(5) 今田寛 (1971). 「動物における病的行動の実験的研究—嫌悪刺激を用いた実験の最近の諸問題」『心理学評論』14, 1-27.

Nageishi, Y., & Imada, H. (1974). Suppression of licking behavior in rats as a function of predictability of shock and probability of conditioned-stimulus-shock pairings. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 87, 1165-1173.

(6) 今田寛 (1975). 『恐怖と不安』誠信書房

Section 3

研究を重ね、まとめあげていく

——物理的変数ではなく心理的変数に着目されたり、「凶図」を反転させたりと、独自の切り口で研究を展開されていったのですね。実験や研究の様子をもう少し伺いたいと思いますが、実験や研究を展開していくうえで苦労したことや工夫したことなど、思い出に残っていることはありますか。

苦労といっても、自分の興味がどんどん広がり、それを実験に移し、データ処理し、何がしかの思考の枠組みに収めるにあたってぶつかった壁なので、みずからが招いたものばかりだったと思います。

前回、「人や動物の適応過程、生き様のような観点から学習の問題に関心をもっていた私は、……「ブツ切り主義」にはどうも共感できませんでした」と書きました。つまり実験者が操作して与えた刺激に対する反応だけを見て、それ以外のときのヒトや動物の状態を無視する「ブツ切り主義」に対して不満がありました。

しかしこれをさらに推し進めていくと、動物が飼育室から実験室に運ばれてきたときのことしか調べないことが気になり始めました。そこで1日24時間連続して、何日にもわたって、良いこと(快刺激)、悪いこと(不快刺激)をさまざまな形で経験しながら生きている動物の生き様のようなものに関心をもつようになりました。これについても論文はあるのですが⁽¹⁾、データ量の多さの中でおぼれそうになったのと、研究をつなぎとめる思考の枠組みに限界を覚えて、この種の研究は長続きしませんでした。また、言い訳になるかもしれませんが、この頃から、学内の役職などがまわってくる年頃になり、忙しくなったことも無関係ではなかったと思います。

心理学の研究というのは、手がけてみると何でも面

白いのですが、個々の事実をつなぎ合わせ、それらをまとめ上げる枠組みのことを考えずに、ただやみくもに断片的事実を興味本位で集めるというのでは、まるで、完成図がどのようなものかわからないままにジグソーパズルのピースを触り続けている姿のようなものです。

私の願っていたのは、アメリカの理論雑誌の最高峰ともいえる *Psychological Review* 誌に掲載されるような、事実に立脚したまとまりのある理論的枠組みを構築することでした。それは残念ながらかかないませんでした。同誌につぐ雑誌、*Psychological Bulletin* 誌に、The concept of uncertainty in animal experiments using aversive stimulation (「嫌悪刺激を用いた動物実験における不確かさの概念」) というタイトルの総括論文を書きました⁽²⁾。

この論文は、「不確かさ」(uncertainty)、あるいは「情報の欠如」という概念を核に、先に述べた予測可能性/不可能性の問題を拡大し、10ケースの「不確かさ」の論理的可能性を列挙し、それらからの演繹可能性を示唆し、関連論文を紹介したもので、当時の私としては、これによって1つの整理ができたのではないかと思います。

「情報の欠如」研究の展開

いま、「情報の欠如」という括りの概念を申しました。予測可能性/不可能性とストレスの問題が示すように、動物は一般に情報の欠如を好みません。何とかして情報が欠如している不確かな状態の中から関連情報をつかみ出し、確かな状態を作り出そうとします。

日常例で言いますと、天気予報が発達していなかった昔の農家の人たちや山岳ガイドは、自然の中の手がかりを巧みに用いてお天気を読むのがうまかったように思います。また、まったくランダムに当てる先生の授業であっても生徒たちは何とか先生の当て方に規則性を見つけ出し(例えばA先生の授業では1度当たると2度は当たらないという、回数手がかり利用)、つかの間の安心を得ようとしています。

このような問題は、一方では手がかり利用という学習心理学的な、あるいは比較心理学的な発展をしました(例えば、ネズミは回数手がかりを利用できるか)。しかし他方、次のような2つの問題に直面することになりました。

1つは、ヒトを用いて予測可能性/不可能性の実験を行ったときに直面しました。ヒトを対象にしてショックのようなストレスを用いる実験を行うことは、倫理上の問題もあってなかなか難しかったのです

が、あるとき名案に思いつきました。それはショックを与える器具（ショッカー）として電気マッサージ器を用いるアイデアでした。これは、電極を肩や腰に付着させて、パルス状の刺激を与えてコリを癒す機器なのですが、マッサージ器と知らずにこの刺激を受けるとけっこうショッカー代わりになるほど不快なのです。これは治療器なので、被験者の同意さえ得れば倫理上の問題はあります。そしてこれをショッカーとして用いることによって、ヒトを対象にした嫌悪刺激の予測可能性／不可能性とストレスに関する実験への道が開かれました。

ところが、予測可能ショックと不可能ショックのどちらを選択するかについてヒトを対象に実験してみると、約3分の1から4分の1の被験者は予測不可能ショックを選ぶのです。動物実験では見られなかった現象です。なぜ、予測不可能ショックを選ぶのかと被験者に問いますと、どうせ受けるショックならば、むしろいつ来るかわからない方が気が楽だ、信号がいつ来るかいつ来るかと心配するのが不快だから、というような答えが返ってくるかと思えば、ショックがあまり強くない場合には、信号ありショックはスリルがなくて面白くないという答えもありました。動物では例外なく見られていた信号ありショックを信号なしショックよりも好む現象は、ヒトでは見られない場合があるのです。

実はヒトの場合には、情報を追い求める人（情報追求者、モニター）と嫌な情報に接することを嫌がる人（情報回避者、ブランター）に分かれるのです。例えば嫌な外科手術を受ける場合、根掘り葉掘り手術の内容を知りたいが人と、むしろ嫌な情報ならぬ方がましとばかりに、積極的に情報を回避する人がいることは想像できるかと思えます。

このような問題に直面したのは、私が公職のために研究を離れなければならなくなってからのことでした。最近暇ができたので、この問題は私の近著『ことわざと心理学』⁽³⁾の中の第5講「地震 雷 火事 親父——先が読めないことはどれほど不安か？」の中はかなり詳しく紹介しましたので、興味のある方はお読みいただければと思います。

いま1つ直面した問題は、予測可能／不可能な刺激がショックのような嫌悪刺激ではなく、食べ物のような好ましい刺激の場合にも、動物やヒトは情報を求めるのだろうかという問題です。予測不可能ショックが嫌われるのは、いつショックが来るかわからないので四六時中ビクビクしていなければならないからという考えは有力なのですが、もしこの説が正しいならば、

予測の対象がショックでなく好ましい刺激（快刺激）であればどういう予測が成り立つのでしょうか。快刺激の場合、いつ来るかわからないと、四六時中バラ色の期待状態におかれるので、かえって予測不可能、つまり情報がない方が好まれるということになるのではないのでしょうか。われわれの経験でも、突然前触れもなくもらったプレゼントの方が、予想されたプレゼントよりも嬉しいということがあります。

ただ、快刺激の予測可能性／不可能性の実験を動物で行うとなりますと、けっこう難しいのです。例えばショックの場合には、実験者はスイッチを押せば望むときに的確にショックを与えることができます。しかし餌のような快刺激の場合、それを実験者が与えてもネズミが食べてくれなければ意味がありません。ですから、このような実験をショックの実験のように適切に行おうとすると、ネズミに手術をして細い管を頬から口の中に埋め込み、甘い液体報酬を決まった時間に決まった量を与えるという方法とか、脳内の快中枢を直接刺激するなどの方法をとらざるをえません。これは大変なことですし、自然の状態を崩すことにもなります。このようなわけで、この種の実験の数は限られていますし、私の知る限り結果も一定ではないようです。

研究者として、教育者としての姿勢

このように、実験というものは、1つの問題が他の問題へとつながり、限りなく興味は広がっていく一方で、次々と難しい問題に直面し、またそれが興味をかき立てるものです。最近の社会は、すぐに役に立つことに価値基準が移行して、私の時代のように興味の赴くままに研究を発展させることが難しくなっているようです。もっとも私の場合も、よりよく生きるために精一杯の努力をしているヒトや動物の姿を広い意味で学習心理学の立場から明らかにしようとしていたわけですから、長い目で見て生きとし生けるものの幸せに役立つことを目指したとっていいでしょう。

そして若いときには、なぜ動物を使うのですか、という問いに対しては、ストレス下のヒトの行動は驚くほど動物の行動に似ているからと正当化していました。しかしいまでは、‘ヒトは動物の仲間であるとともに、ヒトはヒトである’という立場です。一方ではヒトをことさらに特別視しないと同時に、ヒトのヒトである特性をも軽視しないということです。

それでも私のような研究者は、独りよがりとか、研究者の自己満足という誹りを受けるかもしれません。

しかし、目を輝やかさせながら研究をする姿勢を学生たちに見せることが、研究の内容とは別に、研究とか人生を生きるうえで学生に対して教育的意味があるのではないのでしょうか。良い教育者は、まずもって自分のやっていることが面白くて仕方がないという姿を、講義や研究を通して学生に見せることが大切ではないのでしょうか。まず自分が輝かなければ周囲の人が輝くわけがないからです。

そして教育者として大切な3要素は「愛情、熱情、誠意」だと思います。私はこの3語を指針にして教育者として生きてきましたが、実はこれは牧師であった私の祖父の遺言、「愛情、熱情、誠意をもって、死ぬまで働け！」にそのルーツがあります。

■ 文献・注

- (1) Imada, S., Fujii, M., Nakagawa, R., Iso, H., Sugioka, K., & Imada, H. (1983). An attempt to measure effects of electric shock upon rat's drinking, eating and general activities over 24 hours a day. *Japanese Psychological Research*, 25(1), 52-57.
- (2) Imada, H., & Nageishi, Y. (1982). The concept of uncertainty in animal experiments using aversive stimulation. *Psychological Bulletin*, 91, 573-588.
投石保広・今田寛 (1980). 「不安の実験心理学」『心理学評論』23(3), 211-237.
- (3) 今田寛 (2015). 『ことわざと心理学——人の行動と心を科学する』有斐閣

Section 4

人間関係の広がり

——わき上がる興味・関心によって研究を広げていくながら、全体としてまとまりのある理論的枠組みを作っていくことを意識されてきたのですね。教育者として「愛情、熱情、誠意」を大切にしてくられたということですが、今田先生の研究室からは多くの研究者の方が輩出されています。また、海外の研究者の方ともさまざまな交流がなされていたと伺っています。そうした、研究を通じた人のつながりはどのようにできていったのでしょうか。

確かに私の研究室からは、かなりの者が研究者・教育者として全国の大学でよい働きをしています。その姿を見ると教師として無上の幸せを覚えます。しかしそれも、関西学院大学心理学研究室独特の研究・教育の良い伝統と、家族的な良い師弟関係の伝統が背景にあったからだだと思います。その空気については『関西学院心理学研究室 80 年史』⁽¹⁾ をお読みいただければ

わかっていただけるとと思います。ハミル館という面白い構造の独立研究棟が与えられていたこともあり、研究生活というよりは、生活の中に研究があったという雰囲気の中からこの伝統は生まれたと思います。それといまとは違って、大学におおらかさ、よい意味での遊びがあったことも幸いしたと思います。もし私に何がしかの貢献があったとすれば、それは前回にも述べたように、自分のやっている研究が面白くて仕方がないという姿を、研究や教育の現場で示してきたことと、言葉が平易で論理が明解であったことが何がしかの影響を学生に与えたかもしれません。これは次に述べる、英語が私の思考パターンに与えた影響もあったかもしれません。つまり日本語よりも構造がしっかりしていて論理的な英語が、私のものの考え方に与えた影響の可能性のことです。

次に、海外の研究者との交流ということですが、確かに私は、昭和一桁生まれの世代の中では海外との交流が多かった方だと思います。その理由の1つは、私の家庭と関西学院中学部以来の教育のお陰で、英語的思考パターンとコミュニケーションのとり方（論の展開はアメリカ人とイギリス人ではかなり違うので「米語的」というべきかもしれません）に若いときからなじみが深かったことが挙げられるかもしれません。私たちの時代は、英語の論文を書く場合、「縦のものを横にする」という表現が示すように、まず日本語で書いたものを英語に直すということをしてきた人が多かったと思うのですが、私は最初から英語の論文は英語で考えて書く習慣がありました。それは日本語による論の展開と英語による論の展開では、順序や構造ががかなり違うことにも理由があったと思います。いずれにしてもかなり若いときから、英語による論文を、発行部数の多いアメリカの専門誌に積極的に投稿してきたと思います。いまの若い研究者には当たり前のこのようなことを1970年代のはじめ頃からは行っていたのは確かに先駆的だったと思います。そのようなこともあって、しだいに海外の研究者との交流が広まっていったのではないのでしょうか。

ここで海外と私の関係をまとめておきますと、1961年からフルブライト留学でアメリカのアイオワ大学に留学し、指導教授の K. W. スペンスのクラスで書いたペーパーが A++ と高く評価されたことがきっかけで、「お前は、私のもとで学位をとって帰るべきだ」と半ば命令されて Ph. D. を取得しました。若かったのですね、ずいぶん頑張りがききました。

そして1968年からは、今度はブリティッシュ・カウンスルの留学制度によってロンドンの精神医学研究

所の H. J. アイゼンクのところに留学しました。アイゼンクのところでは彼のテニスのお相手もしました。

その後、1990年に京都で国際応用心理学会⁽²⁾が開催された折に開会式の司会をするという大役をいただいたことがきっかけで、国際心理学界の世界に関わりをもつようになり、1992年から3期12年間、国際心理科学連合⁽³⁾の理事を務め、世界各国の心理学者との交わりが始まりました。この国際心理科学連合というのは、4年に1度の国際心理学会を主催している組織です。

日本心理学会は2016年に横浜で、わが国では1972年について2度目となる国際心理学会を主催します⁽⁴⁾。私はこれまでの関係から同会の国際顧問団の1人に名を連ねており、「あなたの国の心理学にとって国際化とは何か：5大陸の比較」というシンポジウムに引っ張り出されております。そのときにはもう82歳になっているので、私が国際的な心理学会に関わるのもこれが最後になるでしょう。1972年の東京での大会時には、駆け出しの若造として協力していた私ですが、あっという間に時間が経ちました。感慨深いものがあります。

実証的なアプローチを大切にした入門書『ことわざと心理学』

——次の世代の研究者を育てたり、海外の研究者の方と交流を深めたりできるのも研究活動の醍醐味ですね。2016年の国際心理学会でも日本の多くの研究者や学生が参加され、さまざまな出会いが生まれるのではないのでしょうか。さて、長年にわたり、学習心理学や実験心理学の研究を続けてこられたわけですが、2015年に『ことわざと心理学』という少し「意外な」書籍を刊行されました。その経緯と、この本のコンセプトを教えてくださいませんか。

「意外な」本、『ことわざと心理学』⁽⁵⁾の出版についてのご質問ですが、私もこのような本を出版することになるとは思っておりませんでした。そこで出版に至るまでの経緯を少しお話しさせていただきます。

私は長年勤めた関西学院大学を退職後、2004年から広島女学院大学の学長に迎えられました。関西学院と広島女学院は W. R. ランバスという同じアメリカの宣教師によって創設された学校ですので、関学時代と同じ教育理念で仕事ができるのでお引き受けしました。

そして2010年まで5年半勤めて西宮に戻ってきたところ、関西学院大学が大阪梅田キャンパスで社会人

を対象に開講している、通称「梅田ゼミ」で講座を担当するように求められました。与えられたテーマは「人生を豊かにする心理学」。このテーマは基礎心理学の人間にとってはいささか重荷だったのですが、長年心理学をやっているながらノーと言うわけにもいかず、引き受けました。

しかし引き受けてみると、続けてほしい、またリピーターがいるので同じ内容は避けてほしいとの要望。これではいくつ引き出しがあっても限度があります。そこで考えたのが「ことわざ」でした。ことわざは人類の叡智の結晶ですから、豊かな人生につながる教えに満ちていますし、ことわざの中には人の心理や行動に関するものがけっこうあるからです。

「目は口ほどに物を言う」(感覚・知覚心理学)、「親は無くとも子は育つ」(発達心理学)、「急いで事は仕損ずる」(行動心理学)、「赤信号皆で渡れば怖くない」(社会心理学)などは、それらを支える心理学的事実はあるのか、学問的証拠で裏づけられているのか。これを問うことにしました。

しかし、ことわざは心理学の全分野にまたがるので、狭い意味での私の専門を超えてしまうこととなります。長年ストレスの実験心理学を手がけてきた私にとっては「地震 雷 火事 親父」などは得意中の得意なのですが、知覚の心理学や社会心理学に関わりの深いことわざになるとかなり勉強をしなければなりません。

しかし現役時代よりは時間があるので、文献検索をし、文献を読んでいるうちにどんどん深みにはまりこむようになりました。その結果、目を輝かせて話すことができるほどになりました。そうこうするうちに、しゃべりっぱなしというのはもったいないように思うようになり、それをまとめたのが今回の『ことわざと心理学』です。

しかし、実験心理学者が書くものですから、中身はグラフや表や数字だらけです。それを見てある出版社からは、もっとやさしく書けないのか。でないと売れないと言われました。しかし証拠に基づくアプローチを何よりも大切にする実験心理学者としては、魂まで売り渡すわけにはいきません。また世の中に人たちに、心理学という学問は、このような実証的な学問であるということを知ってもらいたいと思っても強かったので、この出版社の要望には妥協はしませんでした。

頑固な姿勢に理解を示してくださったのが斐閣の方々でした。ありがたいことでした。確かに、タイトルからいえばもっと面白おかしく書くことができた本であることは間違いありません。しかしそこまで世間におもねる気は毛頭ありませんでした。実証科学であ

る心理学のこのような性質に世間の人たちが理解と関心をもっていたいただければと思うのですが、なかなかそれは難しいようです。

今回取り上げたことわざは 11 ですが、私が取り上げたいことわざはまだあります。したがって私の希望としては『ことわざと心理学』（続編）が出版できればと願っています。しかしそれは今回の出版に対する世間の反響を待たないとします。今回の出版が、続編に対する出版要請があるほどみなさんに興味をもっていただけることを心より願っております。

■ 文献・注

- (1) 関西学院大学心理学研究室 80 年史編集委員会編 (2012). 『関西学院大学心理学研究室 80 年史 (1923 ~ 2003) —— 今田恵の定礎に立って』 関西学院大学心理学研究室
- (2) 国際応用心理学会 (IAAP) のウェブサイト
<http://www.iaapsy.org/>
- (3) 国際心理科学連合 (IUPsyS) のウェブサイト
<http://www.iupsys.net/>
- (4) 第 31 回国際心理学会議 (ICP2016) のウェブサイト
<http://www.icp2016.jp/>
- (5) 今田寛 (2015). 『ことわざと心理学——人の行動と心を科学する』 有斐閣

■ 著 者

今田 寛 (いまだ・ひろし) : 元関西学院大学学長, 元広島女学院大学学長。現在, 関西学院大学名誉教授。主要著作・論文に『ことわざと心理学——人の行動と心を科学する』(有斐閣, 2015 年), 『心理科学のための 39 レッスン』(培風館, 2004 年), 『学習の心理学』(培風館, 1996 年) など。



* サイナビ! (URL 参照) に掲載された記事をもとに作成しています。

<http://chitosepress.com/category/psychology-navigation/>

* 記載された内容の著作権等の知的財産権は, 著者または著者に権利を許諾した者に帰属します。

* 購入者・利用者は印刷・配布して使用することができます。

* CC BY-ND ライセンスによって許諾されています。ライセンスの内容を知りたい方は <https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

